《投稿論文》

# 時間の生成・社会の生成
## ―〈身体〉という根源へ―

周藤　真也

## 序　はじめに

我々は、我々が社会的な存在であるということを前提にすえるのならば、我々の社会的な営みを通してのみ時間を見出すことができる。社会学的な営為[1]において、時間はまず第一にその対象となるところの社会的事象の中に見出され、その営為の対象とされてきたように思われる。社会学的な営為が社会的な営みに焦点を当てていくことを考えれば、社会学的な営為における時間のこのような扱いは当然のところであろう。

しかしながら、翻ってみれば時間と社会との関係の様態はもうひとつあり得るはずである。それは、我々は時間そのものが社会を成り立たせていると考えることもできるのではないのかという疑問をもとにしている。そして、このような関係の様態を前提にすえるのならば、我々は時間を考えることによって、社会を明らかにしていくことができるのではないのだろうか。

本稿は、時間を考えることによって、社会をあぶり出していく試みである。この試みは第一に時間の成立と社会の成立を同時並行的に捉えていくことを目指している。そのために、我々はまず、時間があるということ、あるいは社会があるということそのものに疑念を向けなければならないだろう。この疑念は、極限的には時間なき社会なき世界へとたどりつこう。そして、時間も社会もない世界を前提とし、そのような世界の中に時間や社会を見出していくことを通して、時間や社会の“生成”を論じていきたい[2]。さらに、時間と社会の生成を導き出していく中で、時間があるということと、社会があるということの差異性が自ずと明らかになってくることだろう[3]。

我々は、本稿において論考の出発点となる時間なき社会なき様態を表している世界として、精神分裂病（以下、分裂病と記す）的世界を取り上げ、分裂病的世界を中心にして時間と社会（他者－他者性）の様態を捉えていくことを通して時間と社会の生成を論じていく。

本稿で、分裂病的世界に注目するのは、次のことによるものである。まず、分裂病的世界によって表されている事態は、我々の世界の根源的な状態をよく表しているように思われることである。つまり、分裂病的世界は我々の世界の原基的形態として捉えられるのである。だが、このことは分裂病的世界が我々の世界と区別されるということにおいて分裂病的世界の逸脱性を備給する。我々の世界が分裂病的世界ではないということにおいて、分裂病的世界を我々の世界から逸脱している世界であると捉えることが可能なのである。さらに、この逸脱的形態としての分裂病的世界は、一方では分裂病的世界の「異常性」を可能にするとともに、もう一方で分裂病的世界の原基性に引きつけることによって「行き過ぎた正常性」として現れる。しかし、このような分裂病的世界と我々の世界との区別を逸脱性に転回させるのではない方向性もありうる。この方向性とは、分裂病的世界が我々の世界そのものであることをいうことによって、分裂病的世界と我々の世界との区別そのものを否定しなくしてしまう方向性である。このような方向性は、一方では再び分裂病的世界の原基性を備給するとともに、もう一方では原基性－逸脱性を超越し、正常－異常とは何であるのかを解体させてしまうような傾動を含み込んだものである[4]。本稿において、分裂病的世界に着目するのは、まさにこの点においてである。つまり、分裂病的世界について論じていくことを通して、分裂病的世界と我々の世界の差異を越えると同時にそれを表し、そしてそうすることによってそのような差異すらも消失してしまうことによって、我々の世界について論じることを目指しているのである。そうであるがゆえに、むしろ我々は分裂病的な世界の様態を異質なものとしてではなく当然のものとして了解していく必要があるだろう[5]。

本稿はこれから次のような構成で展開していこう。まず、１章において分裂病的世界が“動かない”ともいうべき時間からなる世界であり、他者は存在していない世界であるということを、ひとりの分裂病者であるＳの世界を取り上げ、Ｓの世界の様態を詳細に検討することを通して導き出す。２章以降は、こ

の“動かない”時間の他者なき世界の中で、時間そして他者を認定していく（そして他者を通して社会の生まれ出づるところを明らかにしていく）ことを試みる。２章では、Ｓの世界に見られる世界の二重性をもとにして、“動かない”時間を現在という時間の二重性に還元する。そして、３章において、このような他者なき世界の中で他者を見出していくことを試みることによって、Ｓ自らの存在と他者の所在（他者性）を明らかにしていく。さらに、４章においてこのようなＳの世界を可能にしている存在として、Ｓの身体へと言及を進め、身体が時間と社会の源泉になっていることを論じていく。

本稿は、あるひとりの分裂病者Ｓの世界を捉え、Ｓ自身が現に時間と社会を生成していることを導き出していく。そして、そのことを通して本稿は我々自身が時間と社会とを〈生成〉する試みとなって時間と社会の生成を論じていく仕掛けになっていることに気づかれることであろう。

## １．動かない時間・他者なき世界

我々はこれからあるひとりの分裂病者を取り上げ、彼女の世界の様態を捉えていくことによって、時間と社会の生成を論ずる足がかりを作っていくことにしよう。彼女の世界は、“動かない”時間の時間のない世界であるとともに、他者のいない世界でもある。そして、そのような彼女の世界のあり方を検討することを通して、時間と社会の構成を導き出していきたい。

我々がここでとりあげるある分裂病者の世界は、渡辺哲夫が『知覚の呪縛』で記述するＳの世界である［渡辺,1986］[6]。Ｓは、1932年生まれの女性であり、彼女の母親の死と軌を一にして著しい行動上の変化が見られ、33歳のとき精神病院に入院せざるを得なくなった。Ｓが自らの世界について語る言葉は時間性を失い、Ｓの世界において他者は消去されていく。まずは、このようなＳの世界の様態をＳの言葉をもとにし見ておくことにしよう。

Ｓは、自らの世界を二重のものとして表現する。Ｓは、自らの領域を「ワラ地球」、あるいは、「オモカゲドコロ（面影所）」、「ワラ所」などと表現す

る。S自身にとってはここが「ワラ地球」であり、自らが「ワラ地球」の重心であるという。そして、Sは「ワラ地球」の隣にある「お隣りの世界」として「オトチ（お土地）」があるという。このようにSの捉える自らの世界は、自らの領域である「ワラ地球」、そして「ワラ地球」に隣接する「オトチ」、これら二つの世界に分割されている。しかし、単に二つの世界に分割されているわけではない。Sがいうようにこれら二つの世界は「瓜二つ」であって、すべての人や物は「二重」であるのだ[7]。つまり、Sの二つの世界は明確に分割されているとともに互いに重なりあっているのである[8]。

Sの世界において、「ワラ地球」と「オトチ」と呼ばれる二つの世界が全く関係しないのであれば問題はないだろう。だが、Sが「二重」であると訴えるように、「二重」であるということは二つの世界に何らかの同じものが存在していることを意味している。この存在の二重性が二つの世界の間でどのような様相をみせるのかは、Sの「オタチギエ」、「タチアラワレ」という言葉によく表れている。Sによれば、すべての人や物は「ワラ」か「カミ（紙）」でできているという。そして、そのような「ワラ」でできたものは、「オタチギエ（お立ち消え）」するものである。だが、「オタチギエ」したはずの「ワラ」が突然「タチアラワレ」るということが起こり得る。消えてもまた何度でも「タチアラワレ」るいうのである。

我々は「ワラ地球」をSの知覚領域として捉えておくことが、Sの世界を理解しやすいだろう[9]。Sは自らに知覚されるものを「ワラ」や「カミ」と呼ぶ。Sは、「ワラ」や「カミ」として知覚される人や物の総体として、自らの領域を「ワラ地球」と呼ぶに至っているのである。それに対して、自らに知覚されないものを「オトチ」の領域におくことができよう。すなわち、「オトチ」とはSの非知覚領域のことである。そして、ある特定の人や物はいつも知覚されているというわけではない。我々はあるものをあるときは知覚していたりするし、あるときは知覚していなかったりする[10]。この知覚していたものを知覚されくなることをSは「オタチギエ」といい、知覚していなかったものが知覚されることを「タチアラワレル」と呼んでいるのである。

「ワラ地球」にある「ワラ」は「オタチギエ」になるものである。しかし、消えてもまた何度でも「タチアラワレル」ものである。このことは、我々の知

覚のことを考えれば次のことを意味していよう。我々が何かを知覚するということに関して、そのものを知覚していないという状態があり得る。そして、知覚していない何かを知覚する瞬間というのは突然襲ってくる。このことは、Sが表現するように「オタチギエ」していたものが「タチアラワレ」る瞬間となる。

Sにとってこの「タチアラワレ」るということは切実な問題となる。なぜなら「タチアラワレ」ることが「ワラ地球」と「オトチ」によって表されるSの二つの世界の明確な区別に対して反証を与えるものであるからである。次のように言い表してみればよいだろう。我々は、「ワラ地球」がSの知覚領域を、「オトチ」がSの非知覚領域を表したものであることを見てきた。「タチアラワレ」るということは、「オトチ」（非知覚領域）にあったはずの何かが、それが知覚される瞬間に「ワラ地球」（知覚領域）に入りこんでくることである。「タチアラワレ」ることは、「オトチ」に属していた何かが「ワラ地球」に属することで「ワラ地球」と「オトチ」の潜在的なつながりを意味していよう[11]。だがその一方で、このつながりはSにとっては「ワラ地球」が完全な閉じた領域ではない、すなわち自らの知覚の不完全性を意味することになる。言ってみれば、「タチアラワレ」ることは「オトチ」に「ワラ地球」とは直接つながっていないいわば“飛び地”を作ってしまうことになるのである。

Sはこの「オトチ」に「ワラ地球」の飛び地ができてしまうという事態に対して、それを避けようとする意図に突き動かされることになる。この意図は、「ワラ地球」と「オトチ」の二つの世界の隔絶性を二つの世界の同一性に還元しようとする試みとなって現れる。この試みには二つの方向性が考えられよう。ひとつは「オトチ」を「ワラ地球」に還元することによって二つの世界を一つのものとすることであり、もうひとつは「ワラ地球」を「オトチ」に還元することによってそうすることである。しかしながら、Sが問題とする「タチアラワレ」るという事態は、「オトチ」であったはずのところが「ワラ地球」になるということである。さらに、「オトチ」は知覚されざるところであって、「オトチ」を「ワラ地球」に還元するのは定義的に不可能なことであると即座に判断されるだろう。なぜなら、「オトチ」を「ワラ地球」に還元することは、非知覚領域を知覚領域にしてしまうこと、つまり、具体的には知覚されざるも

のを知覚することを意味してしまう。しかし、知覚されざるものは知覚されないのであって、この試みはその出発点から矛盾をきたしている。よって、Sが取ることのできる行動は一つしかない、すなわち、「ワラ地球」を「オトチ」に還元することである。そして、そのことによって「ワラ地球」と「オトチ」の二つの世界の区別すらも無くしてしまうことである。

Sはこのことを「ワラ地球をオトチに変える」という。我々はこの言葉の「変える」に「帰る」を見ることができよう[12]。Sは、「ワラ地球」を「オトチ」に「変える」ことによって、「オトチ」に回帰しようとしているのである[13]。Sは「オトチ」に「変える」ことを、「オヤグニ（親国）に帰る」ともいう。Sにとって「オトチ」とは回帰すべきところであり、彼女自らの基盤があり、自らの本質を見出すところとなる。そうであるからこそ、「ワラ地球」とは「瓜二つに見せかけたところ」であって、「瓜二つ」そのものではない。「ワラ地球」を「オトチ」に変えることは、「オタチギエ」よりも強く能動的な意味において「ナクナス（無くなす・亡くなす）」という言葉で表されている。

Sのこの欲動は、知覚されるものに対する否定となって現れる。すなわち、Sは「ワラ地球」にある「ワラ」を「マト」とし、「オトチ」にある「オタカラ（お宝）」を獲得しようとする。この過程をSは「戦争」と表現する。自らの知覚される「ワラ」を破壊しつくすことによって、その結果として自らを「オトチ」の側へともっていこうとする。この試みは、Sのいう「トグロ巻き」という行動になって現れる。彼女は、時にはゆっくりと、時には走るような速さで、常同的に円を描くように歩き続ける。Sはこの「トグロ巻き」がうまくいくと、「オトチ」にある「オタカラ」を「釣る」ことができるのだというのである。

Sのこの試みは成功するのか。確かにSは「トグロ巻き」をすることで一時的に「ワラ地球」を「オトチ」に変えることに成功する。しかし、それは「トグロ巻き」をすることによって可能となっている。常に「トグロ巻き」をすることなどできない以上、完全に「ワラ地球」を「オトチ」に変えることはできない。

Sは「オトチ」に回帰しようとする。しかし、また何かが「タチアラワレ」

るということが起こりうる。そのことで、自らがまだ「オトチ」にはいないことに気づく。つまり、Sは自らのいる位置を知覚してしまう。Sは自らが「ワラ地球」にいることに気づいてしまうのである。Sのこの気づきはSの「マゴウカタナシ」という言葉に表れることになる。Sは、「ワラ地球」と「オトチ」の「瓜二つ」の世界の二重性を訴え、Sの世界が崩れ変容していく様を訴えながらも、「おんなじ、マゴウカタナシ」といい全てが完全に元のままであることを主張する。Sにとっては、「瓜二つ」の世界が「おんなじ」である以上に、自らの世界がどのように変容しようとも「おんなじ」であることが切実な問題である。なぜなら、「おんなじ」であるということは、「オトチ」を希求したにもかかわらずもとと同じように何かが「タチアラワレ」、「ワラ地球」に「ワラ」が存在し、S自身は「ワラ地球」であるということなのだから。

Sはその結果がわかっていないわけではないにもかかわらず、また「オトチ」に回帰しようとする。Sは自らがどんなに「オトチ」を希求しようとも決して達成されないということ、自らが「オトチ」には属しようがないということ、そして自らは「ワラ地球」にしかいないということ、これらのことをS自身もわかっていないわけではないだろう[14]。それにもかかわらず、Sはまた回帰しようとする。

我々にはなにゆえにSはここまでして「オトチ」に回帰しようとするのかという疑問が湧き上がってくるかもしれない。しかし、この疑問に対してここで即座に解答を与えることはできないだろう。それよりもまず第一に、Sが現に「オトチ」に回帰しようとする事態が何を意味しているのかから、我々はSの世界に起こっていることを読みとっていかなければならないだろう。したがって、まずこれからの論考の道筋をはっきりさせるために、我々はSの世界について時間がないということ、そして他者がいないということを検討しておこう。

まず、Sの世界に時間がない、あるいは“動かない”ともいうべき時間から成り立っていることは、Sの言葉の時間性と、Sの世界の不変の様態に求められよう。Sの言葉には、過去形がない。Sはすべてを現在形で自らに今起こっている事柄として語る。このようなSの言葉における時制上の特徴は、Sの世界において時間を抹消している。さらにこのことは、Sの世界に起こっている出来事とも照応される。その出来事とは、Sの世界においては世界が壮絶な変

容を遂げながらも、完全に元のままであるということ（に対する気づき）である。つまり、Sの世界は、変化しようとも変化していないことが明らかになる世界である。Sの世界がこの不変の様態で構成されることによって、時間は“動かない”ものとなる。何も変化しないのであれば、我々はそこに時間を読みとることはできない。だから、Sの世界には時間はなくなっているのである。こうして、Sの言葉とそれによって表されるSの世界の時間性を追っていくと、Sの世界には時間はないと言わざるをえない。

さらに、Sの世界には他者がいない。Sの世界においては、このことはSの世界において他者がどのような存在であるのかということを考えれば明らかであろう。Sは、決して自らの知覚領域にいる他者を実体としては扱わない。このことは、Sは「オトチ」の側に「実人間」としての他者がいるのだと言っていることと照応される。Sの世界において他者は「ワラ地球」における「ワラ」として認められ。このような「ワラ地球」にいる他者をSは「ワラ人間」と言っている。だが、このような他者は実体としては機能していない。それは、「オタチギエ」する「ワラ人間」はふたたび「タチアラワレ」る可能性をもった存在であり、恐怖の対象となる。Sは自らを、他者すなわち「ワラ人間」によって「オカコマレ」され、包囲されていると見ている。そして、このことは「ワラ人間」が「戦争」によって破壊され「ナクナス」べき対象であるということを意味している。このようにSの世界においては、他者は、恐怖の対象となり、抹消されるべき対象となってしまう。そして、そうであるからこそ他者は不確実な存在として「ワラ」である。さらに、Sの世界において他者は抹消されるべきものとして、抹消させてしまっている[15]。なぜなら、「実人間」としての他者は、「オトチ」の側にいるものであり、決して「ワラ地球」にいてはならないからである。

このように、Sの世界において、時間は消失し、他者は抹消されている。Sの世界が、“動かない”時間による他者なき世界であるということは、次章以降においてさらに検討していかなければならないだろう。だが、我々の試みはこのような“動かない”時間、他者なき世界をもととして、時間、社会の生まれ出づるところを見出していくことである。したがって、我々はSの世界が、動かない時間による他者なき世界であるにせよ、そういった世界の中に、時間、

他者を見出すことを通して、Sの世界の様態を明らかにし、時間と社会の生成を明らかにしていきたい。

## 2．世界の二重性・現在の二重性

我々は前章において、分裂病者Sの世界を見てきた。すべてを現在のこととして語るSの世界には、時間がなかった。しかしながら、Sの世界に本当に時間はないのか。Sの世界にも時間は認められるといえなくはないか。

確かに我々はSの世界には時間がないと言ってきた。我々がSの世界に時間がないというのは、Sの言葉とそれによって表されるSの世界の時間性をもとにしたものである。我々はSの世界の時間性の様態をさらに探っていくことによって、Sの世界のどこに時間が存しているのかを見出していくことにしよう。

我々がSの世界を時間なきものであるというのは、Sが「おんなじ、マゴウカタナシ」と表現するような不変の様態に依っている。したがって、我々はまずSが「おんなじ、マゴウカタナシ」というのがどういうときなのかを考えてみることにしよう。Sのこの言葉は、Sの世界が根柢的に覆されてもなお実は全く根柢的に変化していないということにたいする気づきがもたらすものである。この気づきは何がもたらすものであろうか。それは、Sが何を求めているのかを考えていけば容易に理解できるだろう。Sは、「ワラ地球をオトチに変える」ということを最大の願いとしていた。この願いは、「オタチギエ」していたはずの何かが「タチアラワレ」る（知覚していなかった何かが知覚されてしまう）ということに対する逆説的な対処であったのである。すなわち、「タチアラワレ」るということが原理的に起こらなくするために、Sは「オトチ」を希求するのである[16]。そうであるならば、Sの不変に対する気づきは、Sが自らに掲げそれを解決すべく取り組んできた問題が、まったくもって何ら解決に向かっていないということの気づきである。すなわち、この気づきは、「ワラ地球」がまだ「オトチ」になっていないことに対するものである。さらに、このことは「ワラ地球」がまだ「オトチ」になっていない証拠を示唆して

いる。つまり、「タチアラワレ」るということが起こる、もっと丁寧にいえば、「タチアラワレ」るということが今、目前に起こってしまった、そしてその結果として現にここに「ワラ」すなわち人や物が存在しているということを意味しているのである。

「タチアラワレ」るということは不変を意味していた。つまり、「タチアラワレ」るということに関してSの世界において時間は動かない。このことを次のように表してみよう。今、Sの世界に「タチアラワレ」るということが起こったとしよう。これを、$t_1$ 時点と置こう。そして、次にSの世界に「タチアラワレ」るということが起こったとき、これを $t_2$ 時点と置こう。同じようにして、$t_3$, $t_4$, $t_5$, ... と置くことができる。さて、Sの世界において時間が“動かない”と言ってきたのは、「タチアラワレ」るということが、Sが「おんなじ、マゴウカタナシ」というように不変を意味していたことによる。つまり、「タチアラワレ」る各瞬間は、変わらないSの世界ということにおいて強いつながりをもち、同一の時点を形成する。つまり、Sの世界においては、「$t_1 = t_2 = t_3 = \ldots$」であるということができるのである。

ここにおいていえるのは、Sの世界においては、「タチアラワレ」るということに関して同等であることをもとにした動かない時間が形成されているということである。つまり、Sは、「タチアラワレ」るということにおいて微動だにしない時間を作りあげてしまっている。

このようなSの世界における時間性は、我々は時間の中に同質性を見出すことを契機としてのみ時間を構成できるということを如実に指し示すこととなっている。例えば、我々は自然現象の中に、太陽が昇って昼となり、太陽が沈んで夜となり、また太陽が昇って昼となるという循環が認められるならば、このうち「太陽が昇る」という出来事によって一日を計測することが可能である。同じようにして、例えば腹が鳴るによって、時間を計測することも可能であり、こうして構成される腹時計は我々に空腹を告げ、これによって時間の経過を示すことができる。このように我々は時間の中に何らかの同質的な出来事を見出すことによって、時間を計測、計量し、時間を構成していくことが可能になっている。

そうであるならば、Sの世界においても一種の時間が構成されているという

ことが認められよう。それは、「タチアラワレ」るということによる時間の構成である。Sが「おんなじ、マゴウカタナシ」というのは、「タチアラワレ」ることが起こり得、その結果として人や物たる「ワラ」がここ「ワラ地球」に現に存在しているということをもとにしている。このようなSの世界の不変の様態を時間の中の同質的出来事として捉えるならば、Sの世界において、「タチアラワレ」るということで時間を測ることが可能なのではないのか。いや、Sが行おうとしていることはまさしくこのことだろう。Sは、「タチアラワレ」るということによって、自らの“動く”時間を構築しようとしているのである。

このような意味において、我々はSの世界にも“動く”時間が存在しているということは可能である。Sが自らの世界の不変を訴えながらも自らの世界の変容する様を訴えることは、Sの世界にも“動く”時間が存在していることを意味しているのである。そして、Sが行おうとしていることが、自らの時間を作る試みであるとするならば、既にSは時間を“動く”ものとして捉えているはずである。

我々がSの世界にも“動く”時間が存在していると考えるならば、今までSの世界には“動く”時間がない（“動かない”あるいは“微動だにしない”時間である）と言ってきたこととどのように接合されるのであろうか。Sの世界の時間が“動かない”ということを認め、それでもなお、Sの世界にも“動く”時間が存在していると捉えるならばSの世界の“動く”時間はもうひとつの“動く”時間ということになるかもしれない。もし、Sの世界と我々の世界とが異なった世界であり、我々の世界からSの世界を捉えるならば、Sは二つの時間をもっているということになる。ひとつは“動かない”時間であり、もうひとつは“動く”時間である。

Sの“動かない”時間を否定することなくSの世界の変容をもうひとつの“動く”時間として捉えていくとすれば、それは“動く”時間からのズレとして見ることができる。今ここで我々がSの世界に見られるような時間性の二つの様態を図に示してみよう[17]。そうすると、“動く”時間を直線によって表すならば、“動かない”時間はこの直線に対して垂直方向のズレとして書き表すことになるだろう。そして、こうすることによってSの世界の“動く”時間を反復的な時間として再定置することが可能だろう。Sは「オタチギエ」した

はずの人やものがまた何度でも「タチアラワレ」るというように、Sの世界では、「タチアラワレ」ること、そしてこれによって「オトチ」を求めて「ナクナス」こと、その反復によってSの世界が成り立つことになる。つまり、Sは、「ワラ地球」を「オトチ」に変えようとする。しかし、「タチアラワレ」ることによって「ワラ地球」は「オトチ」になっていないことに気づく。この気づきに対して、さらにSは「ワラ地球」を「オトチ」に変えようとする。こうして、Sの世界はその全体で悪循環を構成している[18]。

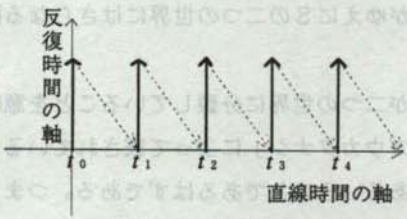



図　時間性の二つの軸

ここで我々が気づかなければならないのは、この気づきの瞬間が非常に奇妙なものであるということである。この瞬間は、時間において相反する二つのことを含んだものである。すなわち、Sの世界における時間が“動く”ことを含み、かつ“動かない”ことを含むものである。つまり、気づきは、以前に気づきがもたらされたということにおいて、時間の経過をSの世界にもたらすけれども、それと同時にその反復性において事態の不変、つまりは時間の不変をSの世界にもたらすものである。さらに、この気づきは時間性の様態においてだけでなく、出来事としてもSの世界においても相反する二つのことを含んだものである。すなわち、この気づきは「オトチ」に存在していたはずの何かに対する知覚である。そうであるならば、その何かは「オトチ」に存在するものであって、それが「ワラ地球」に入り込んでくることは、「ワラ地球」を「オトチ」に変えるというSの願いがかなったことの証しとしても解釈することが可能ではある。だが実際にはこれによってSの世界にもたらされるのは、「ワラ地球」がまだ「オトチ」になっていないという二つの世界の隔絶であった。つまるところ、この気づきはSの「ワラ地球」と「オトチ」という二つの世界の

同一性と差異性とを同時に達成してしまうものであるが、そのことによって二つの世界のさらなる隔絶がもたらされる。確かに二つの世界の同一性と差異性との同時達成は、Sが目指していたところであった。Sは、「ワラ地球」を「オトチ」に変えることによって、二つの世界を同一のものとしようとしていた。しかし、単に同一のものにしようとしていたのではあるまい。その前提となる二つの世界の差異を暗黙の次元に没させようとしていたはずである。そうであるならば、「タチアラワレ」ることによってもたらされるSの気づきは、まさにSの目指していたところのものであるはずである。それにもかかわらず、いやむしろそうであるがゆえにSの二つの世界にはさらなる隔絶がもたらされることになる。

このことはSの世界が二つの世界に分裂していることを意味するのだろうか。Sは、「おんなじ、マゴウカタナシ」によって表されているのは、Sの世界は根源的に同一な世界であるいうことであるはずである。つまり、Sの世界は、Sにとっては唯一無二の変わることない同一の世界なのであって、この意味においてSの世界はひとつの世界なのである。我々はSの世界に起こっていることを詳細に検討していくのなら、第一にSの世界は何ら分裂していないひとつの世界であると見ておかなければならないだろう。それは、ひとつの世界になり得るべきものとして現在において今まさにひとつの世界であるのである。Sの希求する「ワラ地球」の「オトチ」への還元は、意識において既に達成されている。つまり、意識においてその対象が、意識そのものによって達成されている。Sの世界では、意識において意識の対象はそうなり得るべきものとして現在において今まさにそうであるのである[19]。

このようなSの意識によって達成されるSの二つの世界の同一性は、「タチアラワレ」る瞬間、つまりは気づきの瞬間における時間の持続性を縮めていくことによって極限的に得られる同一性である。つまり、Sの世界の二重性の様態はSの世界の時間性を源泉としていると捉えられるのである。さらに、Sの世界の二重性は、現在という時間の二重性でもあると見て取ることが可能であろう。Sにおいては、意識する現在と意識する対象の現在とが同一となる。このことは次のように言い換えられよう。すなわち、現在という時間の持続性と瞬間性とを同時に取り出して達成していると。Sが「ワラ地球」を「オトチ」

に還元しようとする試みは、時間の持続性を取り出すことである。そして、「ワラ地球」が「オトチ」であるということがわかることは、時間の瞬間性を取り出すことである。Sは、この現在の二重性そのものを現在において達成してしまっている。つまり、瞬間における時間の持続性を極限的にゼロにまで縮めることで、すべての気づきの瞬間を同一の時刻のものとすることが可能になっている。

さらにこのことは、Sは現に“動く”時間を形成しようとしているがゆえに、むしろそうであるからこそ“微動だにしない”時間を作りあげてしまっているという事実に照応してくる。例えれば、Sの世界の時間とは、昨日の日の出の時刻と、今日の日の出の時刻とは、同じ日の出の時刻であるということに関して同等であり、同じ時刻（昨日の日の出の時刻は今日の日の出の時刻）なのだという具合にして形成される時間である。つまり、Sの世界の時間は、時間の中の出来事の同質性そのもので形成される時間であり、同質性以外に何も加わらないからこそ“微動だにしない”時間を作り上げることができているのである。

このようなSの世界の時間性の様態は、大森荘蔵が「点時刻の病理」として捉えるところのものであろう［大森,1994］。大森はこのような時間の生成の困難さを時間を時点（時刻）によって捉えることに起因しているとみる。例えば我々は物理学の物理時間 $t$ にみられるような線型的な時間を設定し、その線上を時刻が点として動いていく様態として時間を捉える。しかし、我々が事物の存在を捉える際に、それが「ずっと存在し続けている」という意味が含みこまれているように、時間はある程度持続性をもったものである。そのような時間に持続ゼロの点時刻を設定すること自体が矛盾を孕む源泉となっているのである。

Sの世界の二重性は、瞬間と持続の同時達成によって、現在のみがそれを負うものとして現前している。Sはこのことを「今の私が有り過ぎるんです」と表現する。

こうして我々はSの世界に時間が存在するところをみてきた。Sは自らの時間、いわば“動かない”時間を生成していた。そして、我々はSの世界から世界の二重性と現在の二重性を認識するに至った。さらに、我々はSの世界の他

者を追っていかなければならないだろう。そこで問題となってくるのは、Sの世界の他者を可能にするS自らの存在である。

## 3．自らの存在・他者の所在

我々は前々章、前章でSの世界を見てきた。我々は、Sの世界がひとつの世界であるという見解に達することによって、Sの世界の二重性と現在という時間の二重性を提示してきた。Sの世界がひとつの世界であるのは、ひとつの世界になり得るべきものとして、現在において今まさにそうであった。この論考は、このことを前提としてさらに進めていきたい。すなわち、Sの世界はひとつの世界であるのだと。そのようなSの世界が、時間なき他者なき世界であるとするならば、世界は時間なき他者なきものであることを前提にすえて考えていくことはできないだろうか。そして、その中で、我々は時間の本質から社会の生まれるところを見出していきたい。

前章において我々はSの世界において“動かない”時間の中に時間を認めてきた。今度は、他者なき世界の中に他者を認めていくことで、社会を見出していく道を探っていきたい。我々はそのために、さらにSの世界を検討していくことにしよう。

我々はSの二つの世界は、ひとつの世界になり得るべきものとして、ひとつの世界であると言ってきた。このことは、「ワラ地球」を「オトチ」に変えようとするSの欲動からすれば、極限的に「ワラ地球」は「オトチ」であるといえる。だが、まさにこの欲動は「ワラ地球」は「オトチ」であるということの否定を前提として成り立っているものであった。なぜなら、「ワラ地球」が「オトチ」であるならば、「ワラ地球」を「オトチ」に還元しようとする欲動は必要がないからである。つまり、逆説的なことに、Sの「オトチ」に対する希求は、「ワラ地球」は「オトチ」ではないということを示すものなのである[20]。

だが、翻ってみればやはりSの世界において、「ワラ地球」は「オトチ」な

のではなかったのか。Sの世界においては、「ワラ地球」は「オトチ」になる得るべきものとして現在において今まさに「オトチ」になっていたはずである。

このように考えてくると、「ワラ地球」が「オトチ」であるのか、「オトチ」ではないのか、我々はもはや断言することはできなくなってしまう。だが、それでも我々が「ワラ地球」が「オトチ」であるのかないのかを断言するとするならば、我々は敢えて次のように言うほかはないだろう。すなわち、「ワラ地球」は「オトチ」でありかつ「オトチ」ではない、と。

この命題は、何も論理的に矛盾していない。いや、何も矛盾していないことを前提とすることにおいてしか、我々はSを語ることはできないのではないのか。現在の二重性をそっくりそのまま受け入れてしまったSの世界の二重性を的確に表現しようとすると、我々はこのように表現するほかには表現しようがないところに至るのである。そして、まさにこのことがSの世界に起こっていることではないのか。確かに、Sの世界には一見すると矛盾ともとれる事柄が平然と備わっていた。Sは見たことも触れたこともない「オタカラ」について、それが「オトチ」にあって、「トグロ巻き」をすることによってそのような「オタカラ」が残っていくという。また、Sは、攻撃し破壊する対象である「ワラ」が「オササエ（お支え）」であるという。このように、矛盾を排除せずそのまま相反する事柄が同居しているのがSの世界の在り様なのである。

我々は「ワラ地球」が「オトチ」でありかつ「オトチ」ではないということが真であることがどういうことなのかを考えていかなければならない。そして、我々はこの命題が真であるということがどういうことなのかを言う中にしか、“動く”時間と他者の実在はありえない。そのために、我々はまずSの世界において、どのようにしてこの命題を可能にしているのかを考えなければならないだろう。

Sの世界で、「ワラ地球」が「オトチ」であることを可能にしているのは「オトチ」を希求するSの欲動であろう。そして、Sの欲動を成り立たせているのは、ほかならぬSの存在である。SがSの世界の内に存在するからこそ、Sは自らの世界を構成することができる。だが、Sの世界において、Sの存在はどこを占めているのかを考えると、Sは非常に極限的な位置にあるのではないだろうか。それは、Sは極限的にSの世界そのものになっているということ

である。

「オトチ」はSの非知覚領域であって、Sが直接には接近（知覚）することのできない領域である。この意味で、「オトチ」は「ワラ地球」の限界を構成しているといえよう。そして、そのような「ワラ地球」の限界がSの世界を構成しているはずである。

こう考えると、Sが「オトチ」を希求することは、Sが「ワラ地球」の限界を求めているということであることに気付かれよう[21]。だが、Sは「オトチ」を希求することで「オトチ」そのものとなっている。この状態においては、Sは「ワラ地球」の限界を希求することで、Sは「ワラ地球」の限界そのもの（つまり「ワラ地球」、Sの世界）となる。つまり、ここではS自らがSの世界になっている。別の言い方をすれば、Sが「オトチ」を希求することで「オトチ」そのものになるとき、「オトチ」はSであるとともに、還元されるひとつの世界（つまり「オトチ」）としてSの世界にもなっているのである。

このように、Sの世界におけるSの存在は、Sの世界と同一となる様態であるのだ。このことは、SがSの世界であるというよりも、むしろ、Sの世界がSであるというべきであろう[22]。Sの世界に確かにSは内属している。しかし、Sの世界とSとの間には、何らの間隙も認められない。Sの世界がS自らの拡張の限界によって成り立つとするならば、「オトチ」はSの領域（すなわち「ワラ地球」）の拡張の極限を示す存在なのである。そうであるからこそ、極限において「ワラ地球」が「オトチ」であることが達成されうるのである。

そして、このことは現在という時間の二重性をもとにすれば、その瞬間性においてその持続性が自らの領域の極限を自らたらしめているということができる。「タチアラワレ」ることによる「おんなじ」という気づきの瞬間（＝現在）の時間の持続性を縮めていくことで、極限的にはその持続性は瞬間性に一致する[23]。自らの領域の限界は、時間の持続性の中で世界を形成していこう。こうして形成されるはずのSの世界とS自身の存在は、時間の瞬間性においてそれぞれがそれぞれとして同定される。しかし、この時間の持続性と瞬間性の一致は、持続性によって達成される世界が現在において極限的に達成されることによって、Sの世界とS自身の存在とが瞬間性において同時に達成されてしまう。「タチアラワレ」ることによる時間を形成することで、Sの世界と

S自身とが同一のものとなり、「オトチ」を「ワラ地球」にしてしまっているのである。

こうして形成された時間なき世界はまた他者なき世界でもあった。したがって、Sの世界はS自身と一致することによってSしかいない世界であるのだ。そして、Sが語っていたのは、S自らの世界の様態についてのみではなかったか。確かにそうであろう。だが、それはまた「ワラ地球」が「オトチ」に一致することによって、「ワラ」によって表される自らならざる何ものをも語っていたことを意味するのである。Sが自らの世界についてのみ語っているというとしても、Sが自らならざる何ものをも語っていたことを前提にして言えることなのだ。そして、このことはSは自らしかいない世界（つまり、そのことによって他者のいない世界）を目指していたのではなく、自らすらもいない世界を目指していたことを意味するはずである。つまり、Sは自らすらもいない世界を希求し、それを現在において既に達成することによって、自らしかいない他者なき世界を成しているのである[24]。

Sの世界において、Sの存在はSの世界そのものであることとしても、他者はどこに所在しているのだろうか。我々は確かにSの世界は他者なき世界であると言ってきた。しかし、Sの世界の中には全く他者らしきものすらも認められなかったのか。そう考えてみると、Sの世界において、すべての人や物は「ワラ」であるというように、他者は抹消すべき存在として存在していたといえよう。抹消すべき他者は、「オトチ」にある「実人間」に還元されていた。しかし、S自身が「オトチ」に還元されるべき存在であり、そうなり得るべきものとしてまさに「オトチ」に還元されていたのであり、「オトチ」にある「実人間」に還元される他者は、「オトチ」そのものである「実人間」S自身の内部に還元されることになる。したがって、そうなり得るべきものとしてのS自身の内に他者が存在することになる。そして、まさにそうであるがゆえに、S自身の内に他者が存在する結果として、Sの世界には他者がいなくなるのである。

このことは別の言い方をすれば次のようになるだろう。Sが自らを「オトチ」に還元することは、「トグロ巻き」において「ワラ」が抹消すべき対象としての「マト」になっていたように、「ワラ」を「オトチ」に還元することを介し

てのみ達成されていた。したがって、「オトチ」はそれがＳ自身である以前に、「ワラ」性を帯びる。つまり、具体的にＳは自らを「オトチ」に還元することにおいて、「ワラ」を「オトチ」の側に還元することを通してであって、Ｓは「オトチ」である以前に、潜在的には「ワラ」であるのである[25]。そして、「ワラ」が抹消すべき存在としての他者であるとき、還元する方向となる「オトチ」の側は他者性を帯び、還元しようとするＳは意識においては既にかつ現に他者となのである。

このようにＳ自身はまた他者性を負った存在でもある。そして、我々がＳの世界はＳそのものであるといってきたように、Ｓの世界は「オトチ」を希求することによって他者性のみによって成り立っている世界であるといえよう。だが、この他者性とは、他者の総体である。「オトチ」に還元されるべき存在である他者「ワラ」は、あくまでも個別の他者の実在に対して付与されるものである。したがって、他者「ワラ」の「オトチ」への還元の結果として「実人間」らによって構成される「オトチ」は、個別の実在の集まりにしかすぎず、他者性とはなり得ない。

さらに、このようなＳの世界における他者性はまた他者そのものである。なぜなら、Ｓの世界において他者が「オトチ」に置かれるべきものとして存在し、そのことは即そうなり得るべきものとしてそうなっている以上、我々は「オトチ」に他者が存在していると見なければならないからだ。このことはＳの世界において他者は抹消されるべき存在として現に抹消されることによって、他者が「オトチ」に存在しかつ存在しないことの帰結なのである。したがって、我々は「オトチ」を介することによってこう結論づけられる。「オトチ」はＳの世界において他者がいないことにおいて他者であり、かつＳ自身であるのだと。つまり、Ｓの世界に他者の所在を求めることによって得られる結論は、意識において一つの世界として達成されるＳの世界においてはＳ自身が他者であり、他者がＳ自身であるということである。Ｓの世界においてはいわば自己は他者であり、他者は自己なのである。

こうして、我々はＳの世界において他者の所在を見出すに至った。このことは、Ｓの世界における社会の所在をも示唆することになろう。Ｓの世界において、Ｓは他者性そのものであり他者そのものである。我々はＳの世界に社会を

見出すとすれば、ここにおいてしかないだろう[26]。つまり、Sの世界における社会とは、Sそのものである。Sは自ら自らの時間を構築しようとしていたように、Sは自ら自らの社会を構築しようとしているのである。

Sの世界におけるS自身の存在と他者の所在は、Sの世界がS自身であり、S自身が他者なき世界の他者であった。そして、S自身の領域の極限がSの世界を構成するがゆえに、このようなSの置かれている状態は極限を示すものであった。我々はさらにここからこのような極限状態を成り立たせるものを考えていくことにしよう。

## 4．身体の析出——時間と社会の源泉

我々は、時間なき他者なき世界ということのできるSの世界をその二重性をもとにして、前々章において時間を見出し、前章において他者を見出してきた。Sの世界の時間性については、現在という時間に伴う瞬間性と持続性が同時に達成されている様態として捉えることができたというように、簡潔にまとめることができよう。だが、それに比してSの世界の二重性、あるいはSの世界におけるSの存在と他者の所在についてはそう簡潔には表現してこれなかった。「ワラ地球」と「オトチ」の関係で言えば、「ワラ地球」は「オトチ」でありかつ「オトチ」ではないと言ってきた。これをS自身におきかえれば、S自身は「オトチ」でありかつ「オトチ」ではないものとして存在しているということになる。このことはS自身は「オトチ」そのものであるということでもあった。さらに、Sの存在とSの世界との関係に言及すれば、Sの世界はS（の存在）そのものとも言えた。そして、「オトチ」と他者および他者性の様態に注目することにより、S自身は他者性そのものであるとも、S自身は他者の総体であるとも、S自身が他者であり他者はS自身であるとも、あるいはSの世界においては自己は他者であり他者は自己であるとも言ってきた。これらSの世界についての表現は、奇妙さを伴っているものであることは間違いない。そのいくつかははじめから論理的に矛盾を内包した表現になっている。だが、これ

ら諸々の表現をとることによって、我々はようやくSの世界について語り得てきたのである。このことは何を意味しているのだろうか、このようなSの世界を成り立たせているのは何であろうか。

さらにこのような矛盾を顕現させる試みを続けよう。Sが「オトチ」へ回帰することを求めることは、S自らが「オタチギエ」することを望むことである。だが、Sは「オタチギエ」は死ぬことであると示唆する。「実人間」であるSは、「ヤキナクサナイ（焼き無くさない）」と「オタチギエ」できない。つまり、Sの「オトチ」への希求は、自らを殺そうとすることである[27]。そして、そのことが意識において達成されることによって、既にSは死んでいなければならない。Sが自らに求められていることは、死んでいることであり、それでいてなおかつ生きているといるという事実を許容することなのである。

我々が考えなければならないのは、Sの世界がこのような矛盾を顕現した形で許容しているという点にあろう。そして、このような矛盾は、Sの世界がSにとっては唯一無二のものでありSの生の場であるからこそ[28]、「絶対的」なものとなってしまう[29]。

Sの「オトチ」への希求は、「他者性」（＝「他者」）に対する希求であった。そして、Sの世界において、S自身が「他者性」を請け負っていた。Sの世界における「他者性」は、反照的に即S自身を示すことになる。そうして「他者性」を請け負うことによって、S自身はまた「絶対的な矛盾」をも請け負うことになる。なぜなら、Sしかいない、あるいはSすらもいないところにおいて、このような矛盾はS以外には付与されるところがないからである。であるからこそ、Sの世界において、常にS自身が問題となる。常にS自身が俎上にあがり、S自身が切り刻まれていく。そうして、Sが行き着くところはSの根源である。Sは自らの根源的同一性のある場として「オトチ」を見出し、「オトチ」に回帰しようとし、「オトチ」を希求する。Sは、自らの根源を求めているのである。だがそれはまた、S自らの根源はS自身であるということでもある。S自身にしかその根源は見出せない以上、その根源はS自身であるとしかいいようがない。Sの自らの根源を求める欲動によって、S自身がとりだされてくるのである。

このようなS（Sの世界でもある）を成り立たせるS自身とは何なのだろう

か。我々は、それをSの世界において実際にSの希求を達成する時間[30]が存在していたところに求められよう。Sは、自らの「オトチ」に対する希求を、そうなり得るべきものとして達成していたからこそ、達成してはいなかった。だが、Sが「トグロ巻き」をしている時間だけは違っていた[31]。Sが「トグロ巻き」をするとき、確かにSは「オトチ」に回帰していた。Sは言う、「回ることで、ワラ地球をオトチに変えることができると思います」［渡辺,1986:51］と。「トグロ巻き」をすると、「方角が次から次へと変」わり、「マトが次から次へとズレてゆ」き、「マトになったワラは、オタカラになって、ナクナル」[32]のである［渡辺,1986:57］。

「トグロ巻き」によって可能になるのは、知覚される人や物が絶えず変化し、知覚していた人や物が次から次へと背後へと追いやられ、知覚しなくなってしまうことである。「トグロ巻き」において、Sはすべての知覚対象を自らへと繰り込んで行く。そして、このことを通して「ワラ地球」そのものを解体させてしまい、結果としてSは「オトチ」となる。「トグロ巻き」においてSが「オトチ」へと回帰してしまえるのは、Sが自らを用いているからである。自らを用いることによって、Sは自らの世界を自らへと繰り込むことが可能になり、その結果としてSは自らを自らの世界へ繰り込み、自らの意図を体現させることを実現させていること、―それが「トグロ巻き」によって為されていることなのである。

Sがこのように「トグロ巻き」によって自らの希求を実現させてしまえるのは、何によって為し得る業なのであろうか。それは、「トグロ巻き」において、Sが自らの世界を自らへと繰り込むことを可能にしているその自らに求めていかれよう。そのような自らとは「トグロ巻き」することによって、自らの世界を自らへと繰り込んでいき「ワラ地球」を「オトチ」に還元してしまえる自らであった。そして、このようなSの達成は「トグロ巻き」はS自らの円環状の歩行運動に依っていた。つまり、Sは自らの運動によって、Sの希求を達成していたのである。

さらに我々は、Sの運動を成り立たせるS自らに注目していくことになるだろう。Sの運動を成り立たせているS自らはSの帰属点を形成する。このような帰属点は、Sが自らを用いて運動することのできる物体となっていこう。我

々はそれをSの身体であるということができよう。Sが自らの運動を可能にする自らとは、何よりもまずSの物理的生理的身体となる。Sは自らの身体を用いることによって「トグロ巻き」をすることが可能になり、「ワラ地球」全体を自らへと繰り込み、そして「ワラ地球」を「オトチ」に還元してしまえている。

「トグロ巻き」とは、Sが唯一自らの身体でもって自らの世界を自らそのものを表しているものであり、それによって（少なくとも「トグロ巻き」をしているときは）自らの希求を結果として達成しきるものである。それは、「トグロ巻き」が、S自らの身体の運動であることによって、自らに絶対的な矛盾を請け負うことを課することを可能にしているによっている。「トグロ巻き」はS一流の身体表現であり、かつSの欲動の実現なのである。

我々は、Sの世界はSそのものであると言ってきたように、今ここでSの世界はSの身体であるということが可能になったであろう。Sの身体はSの世界に内属する。しかし、Sの世界において身体はそうなり得るべきものとして世界そのものとなっており、身体と世界との間に何の間隙も見つからない。そのようなSの身体は、「オトチ」でありかつ「オトチ」でないものとしての役割をそのまま請け負うことになる。Sの身体は、「オトチ」でありかつ「オトチ」ではないものとしてひとつの身体である。そして、そのようなSの身体が請け負うのは、世界の二重性であり、現在という時間の二重性であり、絶対的な矛盾の許容である。

そして、我々がSの世界において、Sそのものが時間であり社会であったように、さらにはSの世界がそうであったように、Sの世界の時間、社会はSの身体そのものとしかいいようがないだろう。つまり、Sは、自らの身体でもって、世界をそして時間、社会を形づくっているのである[33]。我々がSの世界は、時間なき世界、他者なき世界と言ってきたように、我々はこのようなSの世界における時間、社会を直接にはみることはできないかもしれない。しかし、我々が今までみてきたようにSは確かに自らの時間を〈生成〉し、自らの社会を〈生成〉していた。たとえそれが“動かない”というべき時間であったり、他者なき世界というべき社会であったとしても、今、まさに〈生成〉していたのである。この〈生成〉する現場がSの世界である。そして、〈生成〉すると

ころはSの身体に見出される。Sの身体は運動を伴うことによって今まさに時間を社会を〈生成〉している。つまり、Sの身体は世界を〈生成〉しながら、時間、社会を〈生成〉する現場であったのである。

この〈生成〉する現場を見るとき、時間は再び焦点化される。現にSの希求を達成している「トグロ巻き」をしている時間は、現在という時間の二重性を負うものであるけれども、どこまでも縮めてもゼロにならない持続性を持った時間となる。つまり、希求の達成を可能にするSの身体は時間を消滅させながら、新たな時間を生み出している。

## 5．おわりに

我々は分裂病者Sの世界を用いて、時間なき世界、他者なき世界に時間、社会（他者ー他者性）を見出していくことを試みてきた。Sの世界は、Sが自らの身体を用いることによって、自らの時間、自らの社会を作りあげるものであった。そして、S自身が自らの身体を用いて時間、社会を〈生成〉していた。こうして、我々は身体が時間と社会の源泉となっているところにたどり着いた。つまり、身体は時間と社会を負うものであり、少なくとも原初的には身体そのものが時間であり社会であり、身体は時間と社会を生成する源泉となっていたのであった。

だが、身体が時間と社会の生成する源泉であり、Sの世界においてSが自らの身体を用いて現に時間と社会を生成していたとしても、Sの世界において身体は存在していないというのも事実である。なぜなら、Sの世界とSの存在とが一致していたように、Sの身体はSの世界と一致するのであり、全てがSであり、Sの身体であるなるば、Sは決して自らの身体を知覚することはない。つまり、Sの世界＝身体は、時間、社会を生成しながら、身体の不在をもたらしていたのである。

〈注〉

(1) ここでいう社会学的営為とは、必ずしも学問的な営為としての「社会学」とは限らず、我々自身の事柄を認識し解釈し納得する営為一般を含んでいる。

(2) このような論じ方は、社会の生成（発生）という疑問に対するひとつの解答方法であると考えられる。

(3) 本稿では、時間があるということと、社会があるということの差異性までは明示的には扱ってはいない。本稿が中心的に扱うのは、その差異が可能になる同一性の水準である。

(4) このような区別（差異）をもとにした諸問題の発生と転回は、分裂病的世界をどのように捉えるのかということにとどまらない重大な示唆を含んでいるように思われる。例えば、区別（差異）を逸脱性、正常－異常の軸へと転回させていくことによって「差別」が可能になることがわかるであろう。

(5) このことは、分裂病が何であるのかということにも関わってこよう。分裂病の原因、分裂病に対するアプローチをめぐって様々な論争がなされてきており、精神科医によって分裂病観が異なるという具合に、分裂病という疾病が存在するということ自体が大いに疑問であることには留意しなければならない。本稿は、分裂病論ではないのだが、このような分裂病をめぐる諸状況をふまえつつ、分裂病そのものについても迫っていくことも意図している。

(6) 渡辺は『知覚の呪縛』のほか、このSの世界についていくつかのところで論及してきている。あわせて［渡辺,1980］［渡辺,1981］［渡辺,1982］も参照。また、Sの世界および『知覚の呪縛』をめぐっては大森荘蔵、野家啓一をまじえた対談［大森・野家・渡辺,1987］も参照されたい。

(7) 渡辺はこれを「世界二重化特性」と表現している［渡辺,1986:109］。

(8) この世界の二重性は、球面上に円を描くことによって表すことができよう。

ある球が存在すると仮定し、その球の球面上に円を描くことにしよう。この円によって隔てられた二つの領域はSの世界においては、「ワラ地球」と「オトチ」とに相当しているだろう。ここで問題がある。球面上に描かれた円は、その円の中心点の対蹠点を中心とする円でもあるのである。つまり、ここに描かれたひとつの円について二つの中心をもつひとつの円であるということにおいて、その円によって隔てられる二つの領域は二重性をもつ。さらに、球面上に描かれた円は、その円の半径にその球の大円の円周の長さを足しあわせたものを半径とする円でもあるということにおいて、その円の外部の領域をも内部に含み込む。つまり、描かれた円の

内部と外部の二つの領域は、円の内部領域としてのみで捉え得るのである。

(9) 渡辺が「ワラ地球」をSの知覚領域であると解釈することに基づいている。渡辺は、このようなSの二つの世界と知覚との関わりについて図示を試みている［渡辺，1980:344］。

(10) ウィトゲンシュタインが言及するアヒルーウサギ［Wittgenstein,1936−49=1976:385ff］やルービンの杯、図地反転図形などをめぐる論議がこのことを考える上での参考となろう。例えば、我々はアヒルーウサギの図をあるときはアヒルの頭として見たりするし、あるときはウサギの頭として見たりする。もし、我々が知覚していないということを何らかの見方として表し（例えばウサギの頭）、知覚している状態と知覚していない状態以外の状態が存在しえない（例えばアヒルの頭とウサギの頭以外のものとして見ることは起こり得ない）と仮定するならば、知覚の様態とアヒルーウサギの図の見え方の様態とは一致することになろう。

(11) 渡辺はこのような二つの世界がつながる様態を「世界地続き特性」と表す［渡辺，1986:109］。

(12) 「変える」という語が、「帰る」とい意味を暗に含んで使われるように、分裂病者の言葉に複数の意味を含んだ語が用いられることは、同音語の多い日本語では特に顕著にみられることである。そこでは、ある音で連想される複数の語の意味が含み込まれているのである。次の「ナクナス」という語にもこのことは現れている。

(13) 渡辺はSの唯一無比かつ究極の欲望を「オトチに戻りたい、オトチに帰りたい、オトチに変えたい」とまとめている［渡辺,1986:77］。

(14) このことを「Sは本当にはわかっていない」ということも可能であろう。Sは自らを「実人間」であるというが、それを「実人間なんだそうです」という具合に自らならざるものの視角に帰着させる。このことは、Sは自らが「実人間」であるとたどることはできても、理解できていないということを意味してしまうだろう。だが、「本当にはわかっていない」といってしまうことによって捨象されることもまた多いのである。むしろ、Sの世界の構成はこのことがわかっていることを前提として成り立っている以上、我々もSはわかっているということをもとにして論じていくべきではないだろうか。

(15) さらに「社会」の成立が「他者」の成立を前提としていることで、Sの世界には「社会は生まれていない」ということができる。

(16) この「オトチ」への希求を、未来に起こるかもしれない「タチアラワレ」るということを先回りして起こしておくと捉えるならば、木村敏が分裂病者の時間的特性を未来先取り的性格［木村,1981］［木村,1982］と捉えることに相当しよう。

(17) “動く”時間（直線的な時間）を「直線時間の軸」と名づける軸によって表し、この軸からのズレとして表される“動かない”時間（反復的な時間）を「反復時間の軸」と名づける軸で表す。この2つの軸をまとめて「時間性の二つの軸」と呼ぶことにしよう。Sの世界の“動く”時間のは、このように捉えることによって逆説的な二重性を呈す。ひとつはSの世界の“動く”時間が我々の言ってきた“動かない”時間のことであり、もうひとつは“動かない”時間（＝Sの世界の“動く”時間が“動かない”時間の様態をもたらしているその“動かない”時間あるいは“動く”時間）であるということが結果として“動く”時間（＝Sの世界の変容）をもたらしていることである。

さらに、これら二つの軸を主導的に用いることによって、任意の時間感覚を表すことが可能になってくる。例えば、これら二つの軸にさらに円環性を加えることで、真木が示す時間意識の四つの形態［真木,1981］のどれもを導き出すことができる。

(18) このような悪循環は世界全体で構成されるものであることに留意しなければならない。そして、悪循環が世界全体で構成される世界であるということで、Sの世界とSの存在の指し示している宇宙は一致する。Sは、「ワラ地球」という「ここ」は「全宇宙・全世界」であるという［渡辺,1986:34］。

(19) 別の言い方をすれば、Sが「オトチ」を希求し、「ワラ地球」を「オトチ」に還元しようと試みれるのは、Sの意識によってなされることがらである。

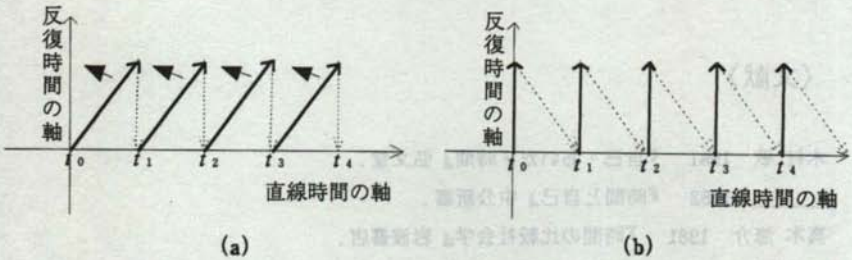
(20) このことは「ワラ地球」がSの知覚領域であり、「オトチ」がSの非知覚領域であると考えれば明らかだろう。「ワラ地球」がSの知覚領域であるならば、非知覚領域「オトチ」は知覚領域「ワラ地球」たりえない。なぜなら、非知覚領域は知覚領域ならざる領域であって、このような領域ははじめから知覚領域から排除されているのである。それにもかかわらず、Sが「ワラ地球」を「オトチ」に還元しようとすることは、非知覚領域（すべて）を知覚しようとする欲動でありSの意識である。

(21) Sが自らの領域の限界を求めることで、S自身とSの世界との間の間隙は消滅する。

(22) ウィトゲンシュタイン（Wittgenstein, L.）の「私は私の世界である」［Wittgenstein,1918=1975: 命題5.63］という命題に比していうならば、Sにおいては「私の世界は私である」となろう。「私が私の世界である」ということは、

「私の世界は私である」ということでもある。しかし、「私の世界は私である」ことを強調することによって、「世界は私の世界」であるというように独我性を帯びてくることになる。

(23) このことは、先の「時間性の二つの軸」の図で表せば模式的には次のように示せるかもしれない。時間の瞬間性は「直線時間の軸」方向にずれることによって、持続的な瞬間を構成していよう（図（a））。この斜めの矢印は、時間の瞬間性と持続性の双方を負うものである。だが、この持続を縮めていくことは、図でいえばより「反復時間の軸」方向に引きつけられることを意味する。そして、極限的に縮められ斜めであった矢印が「反復時間の軸」と平行になるとき、時間の持続性は自動的に瞬間性と一致することになる（図（b））。




(24) このことをマートン（Marton, R. K.）流に「自己破壊的予言」として捉えることも可能である。だが、それは意識による既達成であることに注目しなければならない。つまり、自己破壊的予言は、意識における予言の自己成就をもととしているとみることができるのである。

(25) Sが自らの領域を「ワラ地球」というのは、このことを如実に示している。Sは反省的あるいは未来先取り的に自らが「ワラ」であることを自覚しているのである。

(26) ここでもちだしてきた社会というものをどのように見るのかということは、ここではひとまず置いておきたい。ここで、重要なのは、社会を見出すとするならばここにおいてしかないということである。

(27) このようにSの「オトチ」への希求は、死を希求する欲動であるということがいえる。また、Sは自らが生きている限りにおいて不可能なことを達成しようとしていることからもこのことはいえる。

(28) ウィトゲンシュタインの命題であれば、「世界と生とは一つである。」［Wittgenstein,1918=1975: 命題 5·621］となるであろう。

(29) このような「絶対性」はもはや「相対化」の余地を抹消してしまった「メター絶対

性」あるいは「絶対的絶対性」である。

(30) この時間は２章で扱った現在という時間の二重性を負うものではあるけれども、“動かない”時間からの乖離が認められる。

(31) もちろん「トグロ巻き」はいつもうまくいくというわけではない。Sは「トグロ巻き」の失敗を「脱線」と呼んでいる［渡辺,1981:345−346］。

(32) これが「ナクナス」ではなく、「ナクナル」であることに注意されたい。「ナクナル」によって示されているのは、Sが結果としてすべての「ワラ」を「オトチ」に変えることに成功しているということである。

(33) 渡辺はこのようなSの身体のあり様を「肉体自我」と名づけている［渡辺,1986:121］。

## 〈文献〉


木村 敏　1981　『自己・あいだ・時間』弘文堂.

＿＿＿　1982　『時間と自己』中公新書.

真木 悠介　1981　『時間の比較社会学』岩波書店.

大森 荘蔵　1994　『時間と存在』青土社.

大森 荘蔵・野家 啓一・渡辺 哲夫　1987　「知覚の呪縛あるいは他者の消去」『現代思想』15−2：230−251.

渡辺 哲夫　1980　「慢性分裂病態における局外性と中心性について—１分裂病者の体験構造を通じて—」『精神医学』22−1：43−51.

＿＿＿　1981　「精神分裂病性経過に現われる円環状常同運動の精神病理学的考察」『精神神経学雑誌』83−6：333−356.

＿＿＿　1982　「身体の変貌—分裂病的独我性の一側面—」『思想』698：139−159.

＿＿＿　1986　『知覚の呪縛』西田書店.

Wittgenstein, Ludwig　1918　*Tractatus Logico−Philosophicus.* ＝ 1975　奥 雅博訳『論理哲学論考』（ウィトゲンシュタイン全集１），大修館書店.

＿＿＿　1936−49　*Philosophiche Untersuchungen.* ＝ 1976　藤本 隆志訳『哲学探究』（ウィトゲンシュタイン全集８），大修館書店.



（すとう　しんや／筑波大学大学院・日本学術振興会特別研究員）